

第5回教育セミナー「若手医師のための勉強会」

前置き

小川 俊一

日本小児循環器学会学術委員会委員長

日本小児循環器学会学術委員会では、若手学会員の学術向上の一環として5年前より学術集会期間中に教育セミナー「若手医師のための勉強会」を開催してまいりました。今回で5回目を迎え、最終日の2008年7月4日(金)に3時間30分もの長時間にわたり、多くの聴講者をお迎えしセミナーを執り行うことができました。教育セミナーのために貴重な学術集会の時間をご提供くださいました会長の中澤 誠先生に厚くお礼申し上げます。

今回は、基礎編として心筋細胞のcalcium handlingの問題を取り上げていただきました。多くの細胞の最終mediatorはcalciumであり、細胞内のcalcium濃度の増高により細胞の興奮が惹起され生体にとって欠くべからざる生物反応が執り行われております。今回は特に心筋細胞内に存在する筋小胞体蛋白にスポットを当て、「心臓の中のカルシウム：旧友の新たな役目」と題して早稲田大学先進理工学部生命医科学科の南沢 享先生にご講演いただきました。心筋細胞におけるCa²⁺の関わり方の歴史より始まり、心筋筋小胞体におけるCa²⁺調節機構、心筋筋小胞体機能異常の要因とその改善策について、先生のご自分のデータをベースにup to dateな話題を組み込んでご講演いただきました。最後に、心不全や不整脈に対する本質的な治療法を考えると、心筋筋小胞体蛋白は新たな標的として非常に重要であり、この分野への若手小児循環器医の積極的な参入が大いに期待されると結んでいりました。

次に、臨床編として今回は「房室中隔欠損症」を取り上げ、内科的立場から榊原記念病院小児科の朴 仁三先生より、また、外科的立場から静岡県立こども病院心臓血管外科の坂本喜三郎先生よりご講演いただきました。両先生とも豊富な臨床経験をお持ちの方々に、ご自分のデータ、ご経験を基に、これから第一線で活躍することが期待される人々への熱いメッセージも込められたご講演でありました。朴先生は房室中隔欠損症の名称に関する歴史的経緯より話を始められ、発生について言及され、その特徴を「上下心内膜床の部分的ないしは完全な癒合不全、心内膜床の下方偏位、流入路中隔の欠損、さらに心内膜床と心室中隔の癒合不全にある」とされました。房室中隔欠損は肺高血圧の進行が速く、早期診断・早期治療が必要であり、高度なテクニックを要求される手術に際して内科側から外科側に十分な情報の提供がなされなくてはならず、豊富な形態の理解や解剖学的知識を有することが臨床に携わる者にとって不可欠である、と結んでいりました。坂本先生は、房室中隔欠損症は多くの修飾因子が加わり治療体系を単純化することは容易ではないとしながら、房室中隔欠損症の二心室型根治手術の基本とその治療成績の現状について講演してくださいました。特に、完全型房室中隔欠損症の手術は以前と異なり、乳児期中期までの一期的二心室根治術が行われることが多くなり、根治術の低年齢化が進んでいると解説されました。また、さらなる治療成績の改善に向けて、内科医および外科医が術前の形態に限らず機能的な面も含む詳細な情報、術中および術後の情報を共有し、絶えずフィードバックして検討し合うことが最も重要なことではないかと力説されておりました。

講師を務められた、南沢 享先生、朴 仁三先生、坂本喜三郎先生、また、座長の労をお執りいただきました上村 茂先生、高梨吉則先生をはじめ、ご来場いただきました皆様に誌上をお借りしてお礼申し上げます。

最後に、学術委員会では学術集会での教育セミナーとは別に、2008年5月10日(土)、11日(日)の両日にわたり

まして「教育セミナー・primary course」を、また12月5日(金)、6日(土)の両日にわたりまして「教育セミナー・advance course：画像診断のプロを目指して」を行いました。両セミナーとも多くの受講者をお迎えし、熱気にあふれたものでありました。本年度も引き続き開催する予定でございます。学会雑誌、学会ホームページを通じてアナウンスしてまいりますので、多くの方々にご参加いただきたくお待ち申し上げます。

また、2008年10月より学会ホームページを通じて、米国心臓学会(AHA)のmentor制度への参加を募っております。この制度は第一線を引退されたAHAの会員がmentorとなり、世界中の循環器病学に携わっている人たちを援助しようとするシステムであります。日ごろはメール等を通じて、またAHA学術集会開催期間中は1日中付き添って面倒をみてくれる制度です。どうぞ多くの方々はこの制度にapplyしていただきたく存じます。詳細は学会のホームページをご覧くださいと存じます。